

## 禅の精神による翻訳

日本の研究者チームが13年に及ぶ作業の末に、カール・コリーノの壮大なムージルの伝記を翻訳した。翻訳の際にチームはおよそ二〇〇件の誤植を見つけた。

オリバー・プフォルマン 2016年3月29日

「《時代の列車》はわれわれ乗客を乗せて、いよいよ速度を増しながら轟然と不確実性へと突き進む」。ローベルト・ムージルは彼の長編小説『特性のない男』にこう書いた。そして否応なく詰めこまれた乗客たちがますます昂じてゆく現代性に直面して抱く、「降りたい、飛び降りたい」という欲求や「引き留められていることへの郷愁」をも感じ取っていた。このオーストリアの作家は自分について語ってもいたのだ。文学市場に次々と新作を送りこむ代わりに、彼は死を迎える最後の日まで作家としての生涯の大半を『特性のない男』というただひとつ大作の執筆に捧げた。この作品にムージルはこの上ない厳密性と意味の充溢を盛りこもうとしたが、未完に終わった——残ったのは、読者の時間を食い潰す怪物とも言うべき本だ。そして今日なお、この本を紐解く者すべてを飲み込んでいる。

### 先駆的な業績

『特性のない男』をすべて読んだといえる者はいないだろう、フランスの劇作家で批評家の Jean-François Peyret はこう述べたことがあるが、彼の言うことは実にその通りだ。ムージル研究も以下のような様相を呈している。ムージルの生誕地であるクラゲンフルトでは千年紀末から、ムージルの作品をデジタル化する作業が進められている。これは長編『特性のない男』だけでなく、何千頁もの遺稿を対象としていて、そこには次々と更新される構想、ヴァリエーション、あらすじの腹案、さらに作家により縦横に張りめぐらされた何千という参照指示が含まれる。この作業の終了は今のところ2023年になる予定だ。

いっぽうわれわれのもとに一人の日本人のムージル研究者から、13年間におよぶ翻訳がついに完了したという知らせが届いた。翻訳されたのは『特性のない男』ではない。ムージルの伝記である。より正確に言えば、カール・コリーノによるムージルの伝記である。それじたい二〇〇〇頁におよび、注だけでも四〇〇頁あるという怪物である。これは先駆的業績であるが、この伝記のためにチュービンゲン在住のムージルのスペシャリストであ

り、かつてはヘッセン放送局の文化部長でもあったコリーノ氏は、ほぼ半世紀にわたって調査研究をする必要があったのである。

2003年に伝記が刊行されるとすぐに日本では東京にある中央大学の早坂七緒教授の監修のもと、複数の研究者からなるチームが翻訳作業を開始した。日本語版は2009年と2012年に分冊の形でまず二冊が出版されているが、その最終巻がこのたび法政大学出版局より刊行された。この翻訳作業は、ミツビシやソニーの経営者がとるジャストインタイム生産方式ではなく、禅の精神を持つ庭師の慎重さと入念さをもってじっくりと進められた。

例えば二千件以上におよぶ人名はまず、日本語の音節文字（もとは単位音量を表す文字だった）であるカタカナに移す必要があった。そして繰り返し点検するたびに「まさに虱潰しで徹底的に」修正も行われた、と早坂七緒氏は自信をもって語る。その結果チームは翻訳作業の際にドイツ語版に二〇〇件を越える誤植を見つけたのである。

## 翻訳者に贈られた赤ワイン

そういう経緯もあり、カール・コリーノも『厳密性の最高度のかたちは、日本人の厳密性だ』と信頼を置く。そして感謝のしるしに〈Musil〉とラベルの貼られた二本の赤ワインを日本へ贈った。「厳密さと魂の事務総局」、これはローベルト・ムージルが彼の世紀の大作の中で人類の救済のために必要としたものであるが、この会議のふたは日本で開けられるのがふさわしいのではないか、われわれはいまそう思うのである。

（翻訳チーム・西野 路代 訳）